

【研究ノート】

スミソニアン国立航空宇宙博物館をめぐる論争 —歴史的背景と展示の現状—

The controversy about the National Air and Space Museum at Smithsonian Institution
— Its historical background and the exhibits today —

松 本 栄 寿 *
Eiju MATSUMOTO

Abstract

This paper gives a brief history of the National Air and Space Museum (NASM) from its beginning to the foundation and reviews some of the criticism attracted by the displays of the museum.

In May1995, the Enola Gay, the B-29 bomber used in the atomic mission that destroyed Hiroshima, went on display at the Smithsonian's NASM. The planning of the exhibit provoked much criticism and as a result, the museum bowed to public opinion and reduced the scale of the display. Throughout the history of the Smithsonian Institution and NASM, there have been cases where the intentions of the Institution have conflicted with universally accepted views and the feelings of society. and it finally gave way. The Enola Gay issue is one such example ; another was the discord between Wright brothers and Langley, the third Secretary of the Institution.

NASM started as a museum which mainly displayed only heroes and inventions glorifying national achievements in air and space world. Since its policy has recently attracted rigorous criticism from historians, the museum is becoming critical of its traditional policy. However, the retreat by the museum following the controversy generated by the exhibit shows just how difficult it is for a museum to change its character.

The author had an opportunity to stay at the Smithsonian's National Museum of American History from 1993 to 1994 as a visiting fellow. Based on the his experience during his internship, He wrote in the Journal of the Museological Society of Japan that the science and technology exhibits in Japan should learn from NMAH. This paper reports not only criticism but also what we can learn from the history and the present status of NASM.

1. はじめに

スミソニアン協会は14の博物館／美術館と多数の研究機関からなる複合体であるが、同時にそれらの

博物館はそれぞれ異質の性格をもつ独立体でもある。¹⁾ここではその一つ、国立航空宇宙博物館(National Air and Space Museum)について成立にい

* まつもと えいじゅ

横河電機 (株) 技術館準備室

たる経過を述べ、その展示に対する批判を紹介する。

現在、スミソニアン国立航空宇宙博物館というと、原子爆弾を日本に落とした B29 (エノラ・ゲイ (Enola Gay) の展示論争を思い浮かべる人が多いであろう。本稿では、この論争にふれるけれども、その詳細には立ち入らない。この論争を考察しようとするならば、スミソニアンおよびその国立航空宇宙博物館の成り立ちと性格を知っておく必要がある。日本でもエノラ・ゲイの議論がかまびすしかったけれども、その論者のほとんどが、スミソニアンと国立航空宇宙博物館がどんな存在であるか、どんな歴史を歩んできたかについて知ることが少なかったように思われる。この知識なくしては、エノラ・ゲイ展示の議論は、結局のところ的外れに終わるおそれがある。本稿はこの空白を埋めるのに役立つと信ずる。

スミソニアンおよびその国立航空宇宙博物館の歴史を見ていくと、その意思がスミソニアン外部の学界・社会における定説・通念と衝突して、その結果スミソニアン側の意思が敗れた事例があったことがわかる。エノラ・ゲイ論争も、この事例のひとつであると見ることができる。

スミソニアン国立航空宇宙博物館は、航空宇宙開発をたたえる殿堂として出発した。航空宇宙の栄光をたたえる展示に対して、歴史家から厳しい批判が浴びせられた。航空宇宙開発を社会との関係において見る展示・その悲劇的側面をも正視する展示をおこなうべきだとする批判である。批判に答えて、近年、スミソニアン国立航空宇宙博物館側もこの立場をとろうとするようになったが、これは重大な路線変更であって、創立以来の伝統を変えようとするものである。一般に博物館が創立時の性格を大きく転換することは困難であり、そのような例はまれであると言われている。²⁾ エノラ・ゲイの展示は路線変更の試みのひとつであるが、この展示をめぐる論争の帰結は、博物館の路線変更の困難さを実証している。

筆者は1993年の秋より1994年の夏にかけて、米国歴史博物館に客員研究員として滞在した。この間に得た経験をもとに、すでに博物館学雑誌においてスミソニアン協会の科学技術展示、とくに米国歴史博物館の背景とその成立と現状について論じ、さらに

日本の科学技術展示との差異とスミソニアンの歴史展示には学ぶべき点が多いことを示唆した。³⁾ 本稿では、国立航空宇宙博物館の歴史と現状から学ぶべき点も、いくつか述べる。

2. 国立航空宇宙博物館の歴史と現状

2.1 概要

まず国立航空宇宙博物館のあらましを次に説明しよう。この博物館はワシントンの中心地モール地区にあるスミソニアンの博物館群のなかでも最も入場者が多く、1976年の開館以来、年間1000万人近く総計1億5000万人をこえる人々が訪れた。日本人を含む外国人観光客にも大変人気があり、入館者の5人に1人は外国人である。またその所蔵品のライト兄弟の複葉機ヴィン・フィズ号や一人乗り宇宙船マーズ・キュリー・カプセルなどが、1994年夏に千葉県幕張のアメリカン・フェスティバルに展示された。⁴⁾

スミソニアン協会は初代ヘンリー (Joseph Henry, 1779-1878) 長官以来、多くの長官 (Secretary) が一種の空への憧れともいった感情をもっていたように見える。それが現在の航空宇宙博物館の実現に結びついたとも言えるが、その成立に至る道程は単純ではなく、むしろ政治的色彩が濃く、創立の事情が現在までもこの博物館の展示に影を落としている。最近でも広島に原爆を投下した B-29 エノラ・ゲイの展示をめぐる、米国内で多くの論争を起し当初の計画内容を変更し、さらに館長の辞任にまで発展した。

発足は1946年に国立航空博物館 (National Air Museum) 条例が設立されたことにさかのぼるが、現在のモール地区の建物はその30年後の1976年に、米国200年建国記念日祭に合わせて7月に開館したものである。コレクションには歴史的・技術的に特筆すべき飛行機約300機、宇宙船・ミサイル・ロケット150機を保有している。この博物館の内容は見方によっては、米国航空の発展を英雄的人物と力の技術でつづったものとも表現することができる。博物館からは公式のガイドブックと、1985年12月に創刊された独自の友の会誌 (Air & Space) が年6回刊行されている。⁵⁾

歴代の館長を次に列記する。

1. Paul Johnston、在任：1964-1971年、航空産

業界

2. Michael Collins、在任：1971－1978年、航空宇宙士
3. Noel Hinnerrrs、在任：1979－1982年、研究者
4. Walter J. Boyne、在任：1982－1986年、空軍士官
5. Mattin Harwit、在任：1987－1994年、天体物理学者
6. Robert Hoffmann：1994…館長代理として在任

これから明らかなように館長は航空産業の関連者が多く、1976年にモール地区の本格的な建物が完成し開館したのは、コリンズ航空宇宙士が館長の時であった。また本格的な歴史家としての考えをもった館長はハーウィットが最初であったが、⁶⁾ 1994年に退任し、1995年9月現在館長は空席のままである。ただし、館長代理が館長不在の任を担うのはスミソ

ニアンでは珍しいことではない。

2.2 建物および展示

長さ208メートル、高さ28メートルの建物の内部は、23の区画から構成されそれぞれ主題が決められている。図1にレイアウトを示すが展示総面積は2万㎡である。インデペンデンス通りに面したメインロビーの頭上には、1986年に9日間の無給油無着陸世界一周をなしとげたボーイージャ1号の機体が展示されており、反対側の「飛行の里程標」と名付ける部屋にはライト兄弟の1号機フライヤー、リンドバーグのセントルイス魂、中央にはアポロ11号の指令船、ソ連のSS-20と米国のパーシングIIミサイルなどが集結している。広島に原爆を投下した爆撃機エノラ・ゲイは、一階の最左端奥の部屋に前方胴体が原爆模型とともに置かれている。二階の展示室には「第一次と第二次世界大戦の航空の間」「飛行の

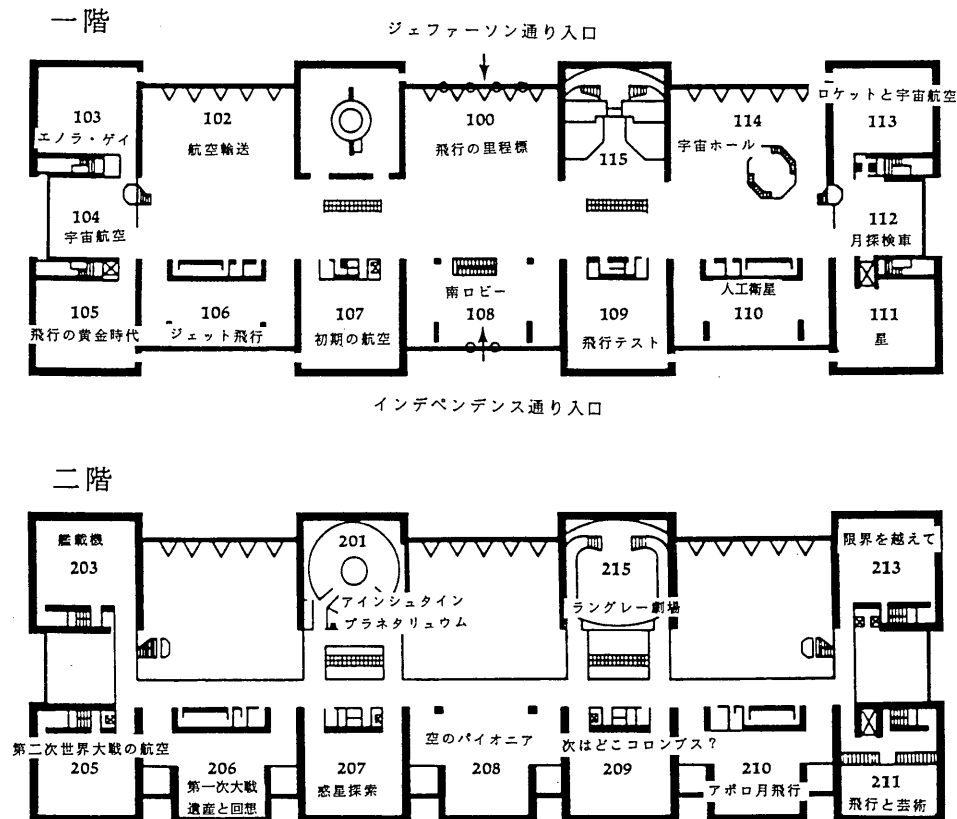


図1：国立航空宇宙博物館レイアウト

パイオニアの間」、コンピュータの航空への導入を展示した「限界を越えて」などの展示がある。(図1)⁷⁾

この航空宇宙博物館からは多くの所蔵品が国内外の博物館に貸し出されているようである。内部にはアルバート・アインシュタイン・プラネタリウムと、アイマックス方式で三代目長官の名前をとったラングレー劇場がある。館内の図書室は航空・宇宙関係を中心に3万冊の書籍、1万種をこえる雑誌を保有し、さらにアーカイブスには150万枚の写真、70万フィートのフィルム、200万枚の技術文書が保管されており、いずれも公開されている。⁸⁾ また、スミソニアンのほかの博物館に比して、研究や展示の成果の出版は活発であると言える。⁹⁾ この博物館はメリーランド州スートランド (Suitland) にガーバー (Paul E Garber) 保存・修復基地¹⁰⁾ をもち、さらにダラス空港近くには、大型の航空機でもそっくり展示できる建物の新設が進行中である。

2.3 スミソニアン協会の空への執着

スミソニアン協会は当初から空への執着をもっていったようで、これに関連して種々の活動や外部への支援も行ってきた。とくに3A主義に代表されるAeronautics(航空学)・Astrophysics(天体物理学)・Anthropology(人類学)が関心事であったと言われ、これらは最終的に天体物理天文台(Smithsonian Astrophysical Laboratory)、国立航空宇宙博物館(National Air and Space Museum)として実現されていると言える。(図2)¹¹⁾

代々の長官は新しい科学技術に関心をもち、進取

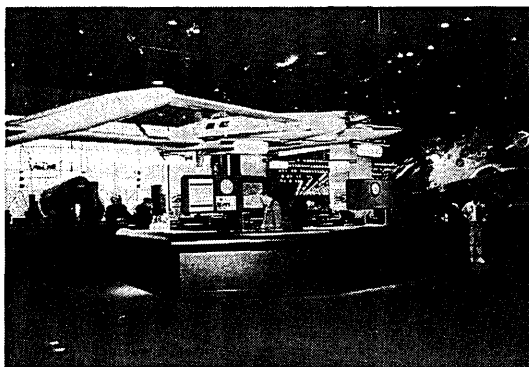


図2：メインゲート内のボイジャー世界一周機

の気質にとんでいた。まず初代総長ヘンリー (Joseph Henry, 1797-1878) にふれよう。ヘンリー自身も電磁石の発明家であり、電気インダクタンスの単位にヘンリーの名称をのこした物理学者であって、当時の米国で最も著名な科学者であった。

ヘンリー長官はまず気象観測に興味をもち、全国に気象観測網を設置した。それはボランティアによるアマチュアをつのり、彼らの観測情報を電信によって収集するものであった。このネットワークは、1848年に発足したが1852年には200人の観測者に加えニューヨーク州・マサチューセッツ州・米国陸軍などの協力をとりつけて、1857年には南はニューオルリーonz、北はニューヨーク州から西はシンシナチまでをカバーし、その情報はワシントン・イブニングスター紙に印刷されるようになった。また1858年には、毎日の天気図が朝10時の情報にもとずいてスミソニアン・ビルに掲示されるまでになった。¹²⁾

やがて、雨・雪・隕石・オーロラなどの情報をもりこんだスミソニアン気象テーブルが発行されるようになり、それらは1869年に気象庁が創立され引き継がれるまでつづいた。このような、スミソニアンのアマチュアリズムとボランティア精神は現代でも生きており、月面観測や、1957年10月4日にソ連のスプートニク打ち上げられた際には、全国的なボランティアを組織化して人工衛星の追跡をおこなっている。

ヘンリー長官は気象観測について、大気の性質に興味をもっていた。1860年には気球の開発者、ロー (Thaddeus Lowe) への援助を行った。それらの気球は南北戦争にも使われたが、ロー自身は大西洋横断の計画をもっていた。

2.4 飛行機、ロケットへの関心

2.4.1 ラングレーとライト兄弟との確執

スミソニアン協会とライト兄弟とは、飛行機発明の先取権をめぐる争い永らく相互不信の関係が続き、最終的に敗れたスミソニアンにとっては大きな汚点を残すことになった。この事情を説明しよう。

三代目長官のラングレー (Samuel Piepont Langley, 1834-1906) は天文学の造詣が深く、スミソニアンでも天文物理学に重点をおいて、1890年に天文物理観測所の木造建物をキャッスル (1865年にス

ミソニアンで最初に立てられた建物で、塔が城に似ているためこう呼ばれる)の隣に完成させた。本格的な天文台は1955年にマサチューセッツ州ケンブリッジに建設された。その初代所長でもあったラングレーの名前は太陽の放射のエネルギー単位に名前を残した(地表で受ける太陽エネルギーは2ラングレーとなる)。¹³⁾

ラングレー自身は空気力学の専門家でもあり、まず鳥の研究からはじめ、人間を乗せる空気より重い飛行機の開発に取り組んだ。1896年に彼の13フィートの翼と蒸気機関をのせた無人機エアロドローム5号機は3/4マイルの飛行に成功した。しかし、1903年12月のポトマック河で行った人間をのせた実物飛行機は二度にわたって失敗に終わった。その数日後、12月17日にはウィルバーとオービル・ライト(Wilbur Wright 1867-1912 and Orville Wright 1871-1948)兄弟のフライヤー機が、ノースカロライナ州キティホークで有人飛行に成功し、僅かの差で先をこしてしまった。このライト兄弟が1899年に飛行機の研究にとりかかった際には、すでに無人機の経験もあったスミソニアン協会から、航空に関する資料を入手していたと言われている。一方、ラングレーは陸軍から5万ドル補助金を受けてスペイン・米国内戦争に備えて斥候と通信のための無人飛行機を作ろうとしていたこともあり、著名な科学者が自転車工のライト兄弟に敗北したことは、ラングレーの名誉を大きく傷つけることになった。(図3)¹⁴⁾

このためか、この後1942年までの39年間にわたり

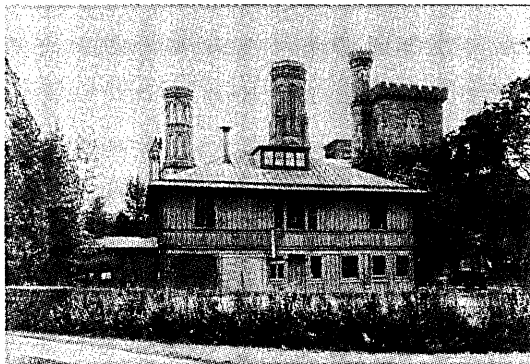


図3：ラングレーの研究所

52.4馬力のエンジンがラングレーの監督のもとに、マンレイによって1902年に作られたとされている。(スミソニアン・アーカイブス)

スミソニアン協会はライト兄弟の飛行機を「空気より重い人間をのせた第一号の飛行機」とは認めず、両者の間には争いが続くことになった。また、最初の人間を乗せた実機飛行に成功したライト兄弟は機体の横揺れを防ぐ主翼のワーピング特許を米・英・仏で獲得していたから、これを強力な武器として他の発明家たちとの間に激しい特許係争を起こしていた。これらの中の発明家達の一人、グレン・カーチス(Glenn Hammond Curtiss 1878-1930)は有力な発明家・企業家であり、自分で補助翼を大きく改良してライト兄弟の特許にいどんでいた。

カーチスは、さらにスミソニアン協会からポトマック河での有人飛行に失敗した、1903年のラングレーのエアロドローム(Aerodrome)の再試験を請け負った。それはラングレー長官の後継者、ウォルコット長官(Charles D. Walcott 1850-1927)が積極的に再試験に進めたのである。ラングレー機はハモンズポート(Hammondsport)のカーチスのもとに送られ再び組み立てられたが、その際に水上機のプロートを取りつけられた。そのうえカーチスは、大きなフロートを付けて重量が増えたのだから、プロペラの推力を増すのは当然であるとして、最初のラングレーのエンジンを使用せずにエンジンの馬力をあげ、同時に35ヶ所にもおよぶ改良を施したと言われている。この加工されたラングレー機は1914年4月にキューカ(Keuka)湖の水面で数回空中に飛行することに成功した。¹⁵⁾

ラングレー機が飛んだのを知ったスミソニアン協会は「本質的な変更を加えられない1903年のラングレー機が、人間を持続して飛行できる最初の空気より重い機械であることが実証された」との主張を続けたばかりでなく、「世界で初めて飛べる飛行機を作ったのは、ライト兄弟ではなくラングレーであった」と言明し、1903年の形に組みなおされたラングレー機が「人間を乗せて自由に飛べる世界初の飛行機」として1918年にスミソニアン国立博物館(現、工芸産業館)に展示されるまでになった。

すでにライト兄弟の兄ウィルバー・ライトは1912年に死亡していたが、このようなスミソニアン協会の態度に弟オービル・ライトが反発し「スミソニアン協会によってねじ曲げられた歴史の誤りを正すただ一つの方法は、キティホーク・フライヤーを外国

の博物館に送るのがよい。将来の歴史家が証拠を公平に調べてくれるだろう」として1928年、ロンドンの英国科学博物館に貸与してしまった。¹⁶⁾

外国で展示されていたライト1号機にたいして、アメリカに戻すようさまざまな声があがり、スミソニアン協会への圧力ともなった。ウォルコット長官の死後、アボット (Charles Greeley Abbot 1872-1973) 長官は自分の手で協会とライト兄弟との間の確執を解決しようとし妥協の形を探った。最終的には協会が1942年の年次報告に陳謝を掲載することによって、紛争に終止符が打たれることになった。1943年オービル・ライトはロンドンの科学博物館あてに返還の要求の手紙を書き、同時にワシントンにのみ展示することとして国立博物館へフ라이어を寄贈する旨の遺言状を作成した。このキティホーク・フ라이어が最終的に米国に返還され到着したのは、第二次世界大戦終了後1948年12月17日のことで、その年の初めにオービル・ライトもこの世を去っていた。¹⁷⁾

ライト兄弟の飛行機をめぐる問題は、最終的には航空宇宙博物館の建設に結びつくことになるが、これはスミソニアン協会の航空への主張が、大きくてははずれて世論に敗れた最初の出来事であったと言える。

2.4.2 ゴダードのロケットへの援助

スミソニアン空への執着のもう一つの例をあげよう。米国のロケット開発者ゴダードに、かつてスミソニアン協会がその資金の援助を行った。ゴダード (Robert H. Goddard 1882-1945 米) はツィオルコフスキー (Konstantine Eduardovich Ziolkovsky 1857-1935 露) とオーベルト (Hermann Oberth 1894-1988 独) と並ぶロケットの三大先駆者である。¹⁸⁾ ゴダードはさまざまなロケットの技術を実行に移した人物であった。液体推進ロケット、ジャイロ安定装置、多段ロケットの特許、真空中のロケット推進の実験などがあった。彼の214の特許にふれることなくロケットを打ち上げることはできないとまで言われ、アポロ計画を実行する際にアメリカ政府は特許を買い上げている。¹⁹⁾

ゴダードの実験は1914年ごろから始まり、最初の成功は固体推進ロケットであった。当時の後援者が

スミソニアン協会と米国通信隊であり、第一次大戦中にはバズーカ砲、固体推進対空ロケットの原形をつくることが出来た。彼はやがてグッゲンハイム基金の支援をうけて1929年には、液体推進ロケットで温度計や気圧計を装備した観測機器を搭載した弾頭の打上げなどにも成功した。²⁰⁾

ゴダードは米国のロケットの先駆者であり²¹⁾、現在その名を付した NASA の基地がワシントン郊外に二ヶ所ある。それらは主として気球による科学観測や人工衛星の観測基地として使われている。²²⁾

2.5 モール地区への航空宇宙博物館の実現

航空宇宙博物館が現在のモール地区に本格的な建物を完成するまでの道程を追ってみよう。

2.5.1 航空博物館条例の制定

ライト兄弟の発明ののち、航空の主導権はヨーロッパにうつり、第一次世界大戦 (1914-1918) では米国は航空機分野で立ち遅れてしまった。しかし、戦場にならなかった米国は第一次大戦後にはしだいに遅れをとりもどし、第二次世界大戦では文字どおり世界の航空界をリードするようになった。第二次世界大戦後の戦勝国である米国で、勝利を導いた大きな要因であった航空機を記念する保存所を作ろうとする考えが、軍から起こったのは当然であろう。

アメリカ空軍の将校ヘンリー・H・アーノルド (Henry H. Arnold) は戦時中に飛んだ飛行機を保存し、ワシントンに収納する博物館を作ろうとの考えをもっていた。一時、軍事博物館をスミソニアンに建設しようとの運動²³⁾があったが、その際にも愛国主義と第二次世界大戦の軍の役割が評価される国立航空博物館の創設が議会に働きかけられていた。このとき上下両員が賛同を示したのは、「最初のライト兄弟の飛行機で始まり、軍事のあらゆる型の航空機にいたる航空機の完全な歴史」であった。最終的には1946年に航空博物館条例が成立したが、トルーマン (Harry Truman 1884-1972) 大統領により署名された法案には、博物館の目的として「航空の国家開発、科学開発の保管庫としての機能、航空の発展の記録の保管、航空の歴史学習のための教育材料の保持」がうたわれていた。²⁴⁾ のちに法案は宇宙を含むよう追加されたが、条例の成立後実際の

建設まで30年近くも要するとは誰も予想しなかった。博物館の真の目的は何かとの論争は、最近のエノラ・ゲイ展示のときまでつづいていると言える。

2.5.2 博物館の実現をめぐる論争²⁵⁾

(1) 初代館長の就任まで

建物が実際に完成するまでには様々な人々がかかわった。そのかかわりから現在の博物館の性格の一端がおしはかれる。

議会では博物館条例は可決されたが、予算は特別に用意されていなかった。スミソニアンが適当な土地と建物を見つけ議会に推奨しなければならなかった。その間にライト兄弟のフライヤーが1948年、英国科学博物館から返還されスミソニアン協会の工芸産業館 (Arts and Industries Building) に展示された。この際もライトの遺言執行者は、とくにフライヤーを記念する別個の博物館を求めている。

一方、スミソニアン協会はアーノルド将軍の力を利用して、コレクションを進めていた。これらの航空機は当初シカゴのオヘア空港の収納庫に収納されたが、朝鮮戦争の際にメリーランド州シルバーヒルのボール・ガーバ補修基地に移された。その間、1949年にはエノラゲイを含むコレクションもスミソニアンに移管されている。やがてスミソニアン協会のキャッスルの隣、ラングレー研究所の跡地にあったもと陸軍通信隊の「ブリキ小屋 (Tin Shed)」と呼ばれる建物が、一応展示場として使用できるようになった。しかし逆に、スミソニアン内部でさえ新たな建設意欲が下火になってしまう。

1950年代の半ばのライト兄弟の50周年の際には、再び建物実現の動きが高まった。当時のカーマイケル (Leonard Carmichael 1898-1973) 長官は議会に「航空機協会と航空貨物協会からの基金の準備もあり、さらにライト兄弟のフライヤー、リンドバーグのセントルイスの魂、超音速ジェット機 (X-1) などと、スミソニアン協会は世界一の航空機コレクションを持つようになり、収容するに適当な建物を必要としている」と報告し、「この博物館こそ航空の記念物であり、航空機こそ米国の科学と米国の創意に富む天才の特色ある成果である」と強調した。

その後、アンダーソン (Clinton P. Anderson) 上院議員の力を得てスミソニアンは1956年モール地

区の現在地を獲得することに成功するが、議会から建物の費用を獲得する段階で、米国芸術団体の要求と衝突してしまった。それは当時「アリアとエアロプレーン (Aria and Airplane) の戦い」と評された争いで、芸術団体が国立センターを設立する計画にあたって「芸術こそワシントンの中心におくべきものであって、航空博物館などは中心地ではなく、空港の近傍がよりふさわしい」と主張したものであった。この論争はケネディ・センターとして芸術の殿堂がポトマック河沿いに実現するまで続いた。

第二次世界大戦の英雄ドーリットル (James Doolittle 1896生、はじめて B25爆撃部隊を率い東京空襲をおこなった人物)²⁶⁾ などの航空界の創始者達は「ライト兄弟の飛行機は殿堂にあたいするものである」と主張し、また「米国の青年に航空機への関心をもっと高めるべきであり、この博物館は米国人に豊かな遺産を思い起こさせる」だけでなく「世界の国々にたいして、米国の航空機が現在世界をリードしているように、人類初めての翼の発明以来米国の常に関心をもったことを周知できる」と繰り返し返した。彼らによれば「航空博物館は航空機のコレクションを収容するだけの建物ではなく、それは世界の最高の遺品、飛行した最初の飛行機を安置する記念館になる」筈であった。彼らの心のなかではライト兄弟は聖者で、1903年のフライヤーは真の聖十字架であったと言えよう。

芸術団体との敷地争いのために建物の実現がおくれ、その解決はカーマイケル長官からリプリー (S. Dillon Ripley 1913生) 長官に引き継がれることになった。リプリーはピーボデー自然史博物館館長をつとめた鳥類学者であったが、20年間の在任期間に8つの新博物館、7つの新研究機関を創設するなど多くの功績をのこした人物である。²⁷⁾ またスミスソンの生誕200年の1965年9月にはスミソニアン友の会 (Smithsonian Associate)²⁸⁾ を発足させた。

彼は「博物館は自身が基本的な教育機関であることを確立しなければならない」と常日頃から信じていたし、このような信念に基づいて航空博物館の館長を選定したようだ。1965年、航空宇宙博物館の初代館長にジョンストン (S. Paul Johnston) が就任した。ジョンストンはリプリーの研究と教育に重要

性についての賛同者であった。

(2) スプートニク・ショックからアポロの月着陸

1957年のスプートニクショックの次の年には、NASA（米国航空宇宙局）が創設され、米国はしだいに宇宙開発でソ連と競争できるようになってくる。やがて1961年の宇宙飛行士シェパード（Alan Bartlet Shepard 1923---）、1962年のグレン（John Herschel Glenn 1921---）の成功の後には、マーキュリ計画のフリーダム7号、フレンドシップ7号がスミソニアンコレクションに追加された。それらは「ブリキ小屋」に展示されたが、1963年の入場者は267万人におよび、本格的な建物が建造されれば500万人の入場が予想されるほどの人気を呼ぶようになってきた。1964年には国立航空博物館の名称に宇宙の名が追加され、建設の再確認法案も1966年により可決されたが、それにはベトナム軍費の大幅な削減後に歳出するとの条件がつけられていた。

この歳出の条件はいつ満たされるのか、明確に知ることではできなかったし、この打開はジョンストン館長やリプラー長官の手の届かない問題に見えた。しかし、1969年のアポロ11号の月着陸が大きく環境を変えた。実際に月の石の展示の際には最初の一ヶ月に20万人もの来観者があった。将来、実物の月着陸船が展示されればライト兄弟のフライヤーと同等な偉大さを訴える展示物になりうるし、新しい建物を確保するには最も良い動機をあたえるように見えた。リプラー長官はじめスミソニアン理事会やスタッフも、予算が認められるようさまざまな働きかけをおこなって、アポロの石の人気や国際的な関心を利用しようとした。さらに、リプラー長官はニクソン大統領の側近にも「博物館は政権に花をそえる」「ソ連が宇宙博物館を計画している」などと訴えて、ホワイトハウスのスタッフ達の関心を引こうとした。

月面着陸の4ヶ月後に開かれた1969年のスミソニアン協会の理事会で、新計画が承認された。理事長であるバーガー最高裁判事の大統領への報告には「アポロ11号の歴史的飛行は米国人に非常な関心を引き起こした。この偉大な航空宇宙の教育・展示センターは、米国が全人類のために技術を開発し、発明を完成させたことを内外に示すことになる」と表明した。この文章の一部は月に残された記念碑にも

刻まれており、熱烈な愛国的表現ではないとしても米国民の誇りを表した文章である。

(3) ゴールドウォーター議員の登場

しかし、このような環境でもホワイトハウスからは、ベトナムの軍事費が1971年の予算では十分に減少していないとの理由で航空宇宙博物館の建設の予算は認められなかった。ここでアリゾナ出身のゴールドウォーター（Barry Goldwater 1909---）議員が登場する。

ゴールドウォーター上院議員は共和党出身の保守派議員であったが、大統領選挙への出馬のため一時は議員を引退していた。政界へ復帰後1970年5月19日、上院の委員会で「航空宇宙博物館危機の時」と演説した。その建設の遅れについてスミソニアンを非難すると同時に、「航空宇宙博物館は社会の要求に見合った資金の配慮を受けていない」と強く主張した。また「いまや、アポロの人類歴史上はじめての月着陸は社会全体の興奮も高めた。米国人は世界最大の航空機と宇宙機器の展示のできる館と、この米国の遺産から何よりも刺戟にみちた航空宇宙感覚を楽しめるセンターを望んでいる」と付け加えた。さらに「金額の問題ではない、ライト兄弟の飛行機に誰が値段をつけられるか」「米国の歴史は若者の挑戦をいとわぬ努力で作られてきた。博物館のために、誰かが米国を称えるゲティスバーグ演説を書く必要があったとは思わない、ライト兄弟やリンドバーグ達によってすでに書かれているではないか。ここにこそ若者を勇気づける物語があるのだ」と主張した。ゴールドウォーターは、英雄礼賛と、古風な米国の成果の祭典を求めた言えよう。²⁹⁾

1971年4月には再度演説に立ち、議会にオービルとウイルバー・ライト兄弟の記念に与えた約束を実現せよと呼びかけた。議会は基金の支出を約束し、これが1972年の予算に繰入れられることになった。リプラー長官は1976年までの完成を約束し、またアポロ11号の宇宙飛行士コリンズ（Michael Collins 1930---）が航空宇宙博物館の館長に就任することになった。後にゴールドウォーターは博物館の実現の功績者としてラングレー賞を贈られている。³⁰⁾

2.6 航空宇宙博物館の開館と博物館の論議

インデペンデンス通りに面した新建物の開館は、1976年7月4日、米国独立宣言署名200周年の数日後のことであった。最初の一月に100万人もの来館者があり、その後も減少の傾向は見せなかった。ここは世界中で最も観客の多い博物館と言えよう。

一般のメディアも博物館の内容に好意的であった。例えば、ニューヨーク・タイムズは「航空宇宙博物館は、鳥であり、飛行機であり、スーパー博物館である」と述べていた。³¹⁾しかし、専門家の評価はわりと批判的である。(図4)

米国の学会誌・専門紙には、博物館やその展示について紹介・論議・批判する欄がある。その一つに1968年に創刊された米国技術史学会(The Society for the History of Technology)の機関紙「テクノロジーとカルチャー」(Technology and Culture)誌がある。その紙面には1995年まで77件の博物館評論が掲載されており、博物館自身とその展示の内容や批判を知ることができる。³²⁾航空宇宙博物館については3件の論評と会議報告1件が掲載されている。この誌面では、歴史家が技術と社会との関係を重視するエクスターナリスト³³⁾の立場をとっているものが多いが、それらの内容を調べて行こう。

2.6.1 科学技術博物館へのいくつかの批判

まず、科学・技術のすばらしさだけを強調する安易な展示にたいする、専門家・歴史家の批判を見てみよう。

スミソニアン協会の次官と、1880年代と1890年代に国立博物館の館長を勤めたグード(George

Brown Goode)は「博物館は教育・研究・コレクションのセンターであり、博物館こそ学問のセンターとして、骨董品の墓場から生きた思想の養成所に変革しなければならない」と主張し続けてきた。「教育に研究や収集とともに重点をおき、収集は継続しなければならないし、それをやめた博物館は死んだ博物館である」とも考えていた。また彼は「新聞などの大衆文化の軽々しい言動のもとに従うと、本物の植物が雑草に隠されることになる」と表現し注意を喚起していた。

このような背景のもとで米国博物館協会のリチャード(Charles R. Richrds)は、1933年に科学技術の博物館は「工業発展の社会的・経済的意味を十分に研究しなければ、人々に教育的なメッセージを与えることができず、美化したワンダーランド(不思議の国)になってしまう」という恐れを表現した。さらに、歴史家のアダムス(Thomas R. Adams)は1939年に著名な三つの博物館、ニューヨーク科学工業館、フィラデルフィアのフランクリン協会、シカゴ科学工業館を批判して「入場者は多いが、まだ商品展示の域をでない。この展示から技術と社会の関連がわかる観客はほとんどいない」と述べている。また、彼は次のようにも指摘している。「例えば機械の進歩の展示には、発明家の業績とともに機械破壊者ラダイト(Luddite)運動者の態度についても説明すべきである。博物館はすべてを物語るのであって、科学に魔術的な役割を与えようとする考えは避けなければならない」また「科学の驚異の原理にのみ囲まれた博物館は宣伝に陥る危険性がある。美化することが社会制度の役割であり、一般人は教育される場所でだまされることになってしまう」³⁴⁾

2.6.2 航空宇宙博物館についての批判

前フランクリン協会(Franklin Institute)の会友、マクマホン(Michael McMahon)の批判の中から1980年代の状況をみてみよう。彼の航空宇宙博物館についての批判は次のようなものである。

「アダムスの批判はまさに航空宇宙博物館について当たっている。インデペンデンス通りに面するこの博物館には、19世紀のキャビネットのように航空と宇宙の歴史的収集物がみたまわっている。『飛行の里程標』に展示されているライト兄弟機や数々の飛

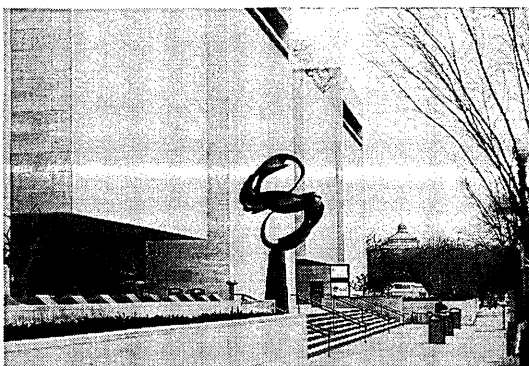


図4：航空宇宙博物館入り口とシンボル

行機、宇宙ホールのミサイル群、アポロ11号の焼けこげた指令船などに来観者は畏敬と驚きをい込む。さらに、展示は進歩と成長、航空のロマン、戦時の空中戦とを結びつけている。英雄のイメージをほめそやし、二つの世界大戦の軍のパイロットもたたえている」

また「全体として博物館は見事に飾られた歴史的な航空機を眺める興奮・好奇心・ノスタルジアの範疇にある。しかし、この博物館の展示に潜むイデオロギーは議会に源泉がある」「それは開館の30年も前にもとがあった。1964年の航空条例の制定前に、アーノルド（H.H.Arnold）空軍司令官が描いた米国と敵の軍事航空機の戦闘の歴史の展示の考えに、民間代表者が将来的な事業の民間航空を強調することを付け加えたものであった」と述べている。

マクマホンによれば「ゴールドウオーター議員と創始者達は若者に刺激を与えるために、展示物は航空の歴史のマイナスの面はさけるべきと考えていた」どんな航空機が展示に相応しいかは多くの問題があったが「ゴールドウオーター議員等は真に英雄的な飛行機のみに関心があった。」「彼らは、広島に原爆を落としたエノラ・ゲイ爆撃機は違う。それが展示されるのはむしろ気にさわる。スミソニアンではなく、オハイオ州デイトンの空軍博物館³⁵⁾に送るべきものだ」と主張した」しかし当時の航空宇宙博物館のテイラー（Frank Taylor）次官がボーイングB-29は、その技術的な内容と戦略爆撃など将来の研究のために保持したいと主張したため保有品として残されることになった。

航空宇宙博物館は、エノラ・ゲイや第二次世界大戦の攻撃的な兵器などを当初は展示せずに発足した。むしろ展示は、すべて進歩のロマンスを強調するものであった。マクマホンによれば「博物館はテレビの番組のアフリカ系米国人をロマン化して描いた「ルーツ」と同じであるし、同様に人気があり一日の観客は5万人に近い。しかしこの人気も矛盾を抱えていると言えよう。ゴールドウオーターは米国の若者の勤勉さの伝統を表したかったのだが、展示物の祝賀と娯楽的な雰囲気の中にかくれている。華やかな航空や宇宙の成果の影に、長時間を要する創造的な改革や、機械工の根気の要る労働なども意識的にさけられている」と述べている。³⁶⁾

3. 航空宇宙博物館の変容の試みとエノラ・ゲイの展示

もともと米国では、技術の歴史の記述は祝賀調であった。これに対し、歴史家は技術革新の社会的効果がいつもポジティブばかりでなかったこと、博物館がそれを考慮していなかったことを指摘していた。近年（1980年頃から）スミソニアンもそれを認め歴史の批判を取り込んだ展示を行うようになってきたが、³⁷⁾ 航空宇宙博物館には変化がみられていない。ラーナー（Howard Learner）は、1979年の「科学博物館の白書」の中で「この博物館は航空工業会の発明の才と航空の栄光の寺院である」と評した。³⁸⁾ このようなセレモニーと賞賛の展示からの脱皮は可能であろうか。つぎに幾つかの展示、研究をとりあげて探る。

3.1 「限界をこえて」の展示

航空宇宙博物館の1989年の新展示「限界をこえて…航空はコンピュータ時代にはいった」³⁹⁾ について『テクノロジーとカルチャ』誌のウィリアムス（Michael Williams）の評論を紹介しよう。

彼は「この展示は、グラマンX-29を中心にすえてコンピュータの利点のみを強調している。航空工業は社会・政治・経済界の影響を考慮しておらず、意義ある歴史的な内容に欠けている」と指摘している。⁴⁰⁾

これに対してこの展示を担当したキュレーターは、「コンピュータが航空工業を如何に変えて来たかに焦点を絞っている。シミュレーション・設計・航空工学・製造・フライトテスト・空中操縦・宇宙操縦の分野を取り上げた。ミニットマン・X-29・マリナ10号・ステルス爆撃機・初期の誘導弾やスーパーコンピュータ・マイクロチップ・誘導システム・CAD/CAM・ロボット・インテルサット6号などに使われたコンピュータをいくつもとりあげた。学童・学生・教師への教育資料試料も慎重に用意されているし、技術と物主体の展示で十分であると考えており、なによりも観客の多さがそれを証明している」としている。⁴¹⁾ これは航空宇宙博物館の展示企画者であるキュレーターの考えが、歴史家の視点と合わない例と言えよう。

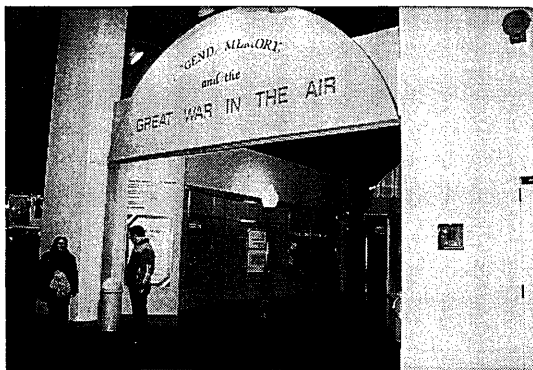


図5：第一次大戦の遺産と回想

3.2 第一次大戦の戦闘機パイロットの遺産と回想

この展示は、従来の航空機と英雄の物語展示を掘り下げ見直して、1991年に開設された。戦闘機について以前は、ハリウッドの映画でつくられた孤独なパイロットのイメージが一般に定着していた。ここでは第一次世界大戦のドイツ英雄リヒトホーフェン男爵のイメージから脱して、航空機の大量生産を可能にした工業、爆撃をさけるために使用されたロンドンの地下鉄シェルター、戦略爆撃戦の広範囲な影響、パイロットと地上の悲劇的な人命の喪失にまでふれた展示を実現した。以前よりは、社会とのかかわりを意識した展示となった。(図5)⁴²⁾

3.3 戦略爆撃機の遺産の研究

博物館内部では、以前には避けていたような主題を取り上げようとの試みもなされていた。その一つは「戦略爆撃の遺産」と題するプロジェクトで、これについて1989年9月より1990年12月までの期間に、講演・パネル討論・シンポジウムなどが空軍士官・大学・専門家の参加のもとに行われた。その中では、第二次大戦前にルーズベルト大統領(Franklin Roosevelt 1882-1945)大統領が、各国に市民や非武装地区への爆撃を避けることを要請していたにもかかわらず、終戦までには200万トンもの爆弾がロンドン・ハンブルグ・ドレスデン・東京・広島などの100以上の都市に投下されたこと、人口の密集地と工業都市への爆撃が英国・米国軍の基本戦略となったことをとりあげて、戦略爆撃の技術的背景・目的・達成など以外に、なぜその戦略が軍事方針の一部になったかについても掘り下げて討

論した。⁴³⁾

しかしこの研究をどう展開してゆくか、具体的な方向づけは明らかでなかったし、戦略爆撃とエノラ・ゲイを結び付けた展示をしようとの考えは実現に至らなかった。

3.4 東西のミサイル展示・祝賀と悲劇のバランス

航空宇宙博物館には、1986年に新設された米国のパーシングIIミサイルとソビエトのSS-20ミサイルとをならべた展示がある。⁴⁴⁾ 以前には考えられなかったことだが、東西両大国間の中距離弾道核戦力(INF)協定が発足⁴⁵⁾して初めて実現したものである。(図6)

『テクノロジーとカルチャ』誌でバツリ(Samuel A. Batzli)は幾つかの指摘を行っているが、その議論にふれてみよう。「以前はミサイルの展示といえど創意に富んだ技術だけを示していた。しかし、この展示物では、武力競争の社会・文化的背景から、軍縮への具体的な段階、つまりミサイルの分解・破棄までを示すことも可能となる」その上、「歴史的な事件や対象を調べる際に、異なった社会的文化的視点から見ると、今まで見過ごしていたことに気付くことがある。たとえば、博物館中のミサイルが、すべて天井から尾翼を上にして釣り下げられるとすると、観客はどんな違った見方をするだろうか」⁴⁶⁾

航空宇宙博物館の第四代のボイン館長は空軍士官で博物館の発展に貢献したが、論争を呼ぶような展示法はとらなかった。1986年コーネル大学の天文学者であったハーウィットが、第五代館長として就任した。彼は技術的な進歩が、どう社会と文化に影響

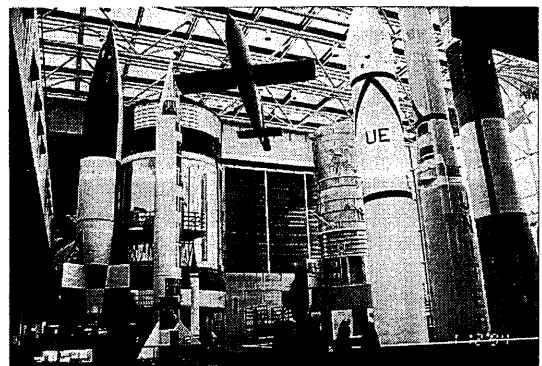


図6：林立するミサイル

を与えたかを大衆に示す事に関心をもっていた初めての館長であろう。ハーウィットはエノラ・ゲイの重要性に気付いており、議論を呼ぶ問題を一般人にとってもよく理解できるよう博物館が展示しなければならないと考えていた。

バツリは次の疑問を抱いていた。「ハーウィット館長の特別アシスタント、ソーター (Steven Soter) は、博物館の展示を祝賀から単に批判的なものにするのではなく、より広く、展示自体を相互にバランスを作り出す方向を考えていた。第一次世界大戦の航空機の展示では、技術革新の英雄と社会的結果をバランスさせようとしていた。他方ライト兄弟のフライヤーのような飛行の里程標の展示では祝賀的な成果を続けようとしている。二つの方法をとるのは最も現実的な方法とも思われるが、バランスとは何でどのようにして決めるのだろうか」

「航空宇宙博物館には、技術を祝賀する展示を作り出す伝統が深く根ざしていた。その責務は国家の航空と宇宙飛行の開発を回想することとされている。しかし、記憶すべき真の意味は祝賀だけではなく悲劇も含むのではないか」と付け加え「エノラ・ゲイと言う強力な収集物は、ふたつの意味をもっているはずである。物を作り出し、飛行させ、戦争の集結を早めた英雄のみでなく、広島悲劇と原子力時代の幕開けも表しているだろう。歴史に批判的な展示を創設しようとする航空宇宙博物館は自己の責務を再解釈し、歴史への見方を変えることになる。このようなことはできるだろうか」と疑問を投げかけている。歴史家は、1990年の時点でもこのような懸念をいっていた。⁴⁷⁾

3.5 エノラ・ゲイ展示をめぐるスミソニアン長官の見解

航空宇宙博物館は、エノラ・ゲイを第二次世界大戦終戦50周年の時期に合わせて、歴史的な解釈を加味した特別展示を1995年5月から1996年1月まで開催する計画をした。最初の展示台本は「分岐点…第二次世界大戦の終結、原爆と冷戦の起源」(The Crossroad: The End of World 2, The Atomic Bomb and the Origin of the Cold War)と題して、マンハッタン計画の公開された資料を用いた1970年代からの歴史学の研究の集大成となる筈であった。

しかしその内容は米国内で多くの論争を巻き起こし、とくに時期が終戦50周年であったためか郷軍人団体からの反対で幾度も修正を強いられる結果となった。また、この動きは日本でも大きな注目をひいた。⁴⁸⁾

この計画について、スミソニアンのとった見解は『スミソニアン・マガジン』の「館長の言葉」欄 (Smithsonian Perspective) に一端が表されている。1994年9月アダムス長官 (Robert McCormick Adams 1926--) が10年の在任から引退し、ヘイマン長官 (Ira Michael Heyman 1930--) が就任したが、同欄でまずエノラ・ゲイについて意見を表明している。

ヘイマン長官は1994年10月号で「キュレーターは原爆展示に原爆投下について、戦争の最終局面や投下に至った経過などにもふれる考えであった。爆発によって生じた廃墟の写真、太平洋で生じた米国人の被害、戦闘が続いたとしたら予想される被害にまでも総合的に展示することを計画していた。しかし、米国在郷軍人が計画中の展示で日本人の被害者を描くことに反対し、議員のなかにもこれに同調するものも多い。予算を削減するという脅しもある」さらに「この論争はスミソニアンにとって基本的な問題を含んでいる。第一はスミソニアン協会の独立性である。人々の中には予算を脅しに使っているものがあるが、これはちょうど大学に教科書やカリキュラムを指示しようとしているのに同じである。米国の強さは学界の政界からの独立性にあったのではないか」と付け加えた。

さらにヘイマン長官は「第二にスミソニアンには博物館の役割がある。我々を教育者より宣伝者と見ているものがある。展示の意義説明を制限しようとするものは、我々を教育の役割をもたない倉庫の番人とみている。その教育者、倉庫のどちらの役割をも制限するのは愚かなことである。過去数十年にわたって、スミソニアンは教育機関であった。それを奪うことは、来場者の理解と学習の手助けにならないし、スミソニアンのキュレータには展示を公平に組織する責務がある」と強調している。しかしその中で「展示の筋書きは、多くの専門家、機関との協議するのが基本であり、まだ変更を受け入れることは出来るし、博物館のスタッフは注意深く状況を観

察している」とも述べている。⁴⁹⁾

ヘイマン長官は翌月の11月号で再びこの問題にふれている。「エノラ・ゲイの展示をめぐる論争は、スミソニアンが単にエノラ・ゲイのみを展示するか、原爆投下を正当化することで避けられるかもしれない。しかし、スミソニアンはもっと広い役割をもっていると思う。国民の教育機関として、公平に平衡感覚をもって展示を行おうとしている」⁵⁰⁾

しかし、ヘイマン長官は1995年1月号では「まず、スミソニアンのアメリカ・インディアンの展示と国立歴史博物館の大統領婦人の衣装展示にふれ、展示に伴う解釈や説明が重要であるが時として論争を呼ぶことがある、いつでも我々は批判は受け入れてきたと述べた。ついでエノラ・ゲイの展示計画については、わたしが就任の際に述べたように、我々の最初の草案は不適当なものであった。原爆使用の内容に過度の注意が払われ平衡感覚に欠けていた。関係する歴史家・関係者と協議の上、修正することにした。最終案は起こったことの忠実な記録で、国家の誇り、軍人の犠牲、科学者の技能、工業の生産に基礎をおくことになろう。欠陥があれば修正すること、誤りから学ぶ事がより重要である」と締めくくっている。⁵¹⁾

この展示の開催までには修正が行われ、原爆投下を分析したり解釈を加えたりしたことは適当ではないとされ、特別展示ではなく「B-29原子爆弾投下機と搭乗員のインタビューのビデオ映像等の内容」を展示することになった。この最終変更の内容につ

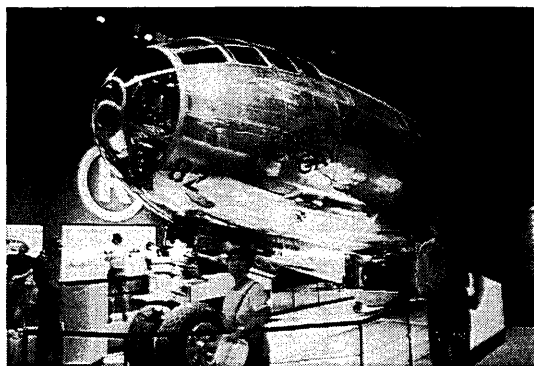


図7：エノラ・ゲイの展示
前方胴体と尾翼のみ
(加藤敏雄氏撮影)

いて『スミソニアン・マガジン』に長官の説明は掲載されていない。(図7)⁵²⁾

以上、エノラ・ゲイ展示についての長官の見解を簡単に見てきたが、この論争の帰結は、ラングレー・ライト兄弟問題におけるスミソニアンの失敗と共通点がある。それは、博物館の主張と外部世界の主張との衝突という点である。エノラ・ゲイ論争を、内容の正当性という視点だけからでなく、この衝突という視点から見ることはできるのでないだろうか。エノラ・ゲイ論争はひとまず終わったけれども、スミソニアンおよびその国立航空宇宙博物館に対するこの論争の影響は深く長く続くはずであって、その影響を考えるにあたっては、こういった視点が不可欠であると思われる。

3.6 米国歴史博物館の展示の場合

スミソニアンの中で科学技術をあつかう博物館としては、航空宇宙博物館のほかに米国歴史博物館がある。航空宇宙博物館と比較して米国歴史博物館の展示を見て行こう。ここにはストーリー性をもった大型の科学技術の展示がある。電気、情報化時代、サイエンス・イン・アメリカンライフなどで、米国の歴史と科学技術の社会性の相互関連を表現している。

スミソニアン・マガジン1995年9月号に興味あるヘイマン長官の意見が掲載されている。それは米国歴史博物館で行われている第二次世界大戦記念の展示である。彼は三つの展示例をあげている。⁵³⁾

- (1) 「GIと第二次世界大戦」：大戦の武器からユニフォーム、毛布にいたる400点の様々な遺品・記念品や写真をならべた展示でストーリーはない。
- (2) 「第二次世界大戦とその共有する記憶」：戦場や家庭で使われた日常のコレクション……ジープ・ポスター・書籍・音楽など、兵士や家族共通の思いのあるもの……見学者には自分の感想を記入するノートがおかれている。
- (3) 「日系米国人のさらなる団結」：戦中の日系米人部隊の活躍を表現したもので、以前から展示されていた「日系米国人の強制隔離」と一体の展示でストーリー性がある……人によっては解釈がことなり、論議をよぶ展示である。⁵⁴⁾

これら展示を紹介して「この3種はまったく異な

った展示法である。人によってはこれを見て、演出を否定的にとったり、スミソニアンは統一がとれていないと見るかもしれない。しかし、私はこれも自己修正的に前向きの、融通性のあるシステムと考えている」とハイマン長官は付け加え、さらに「私はスミソニアン展示の、適切な範囲と性質を探して行きたい」とも述べている。

(1)は半年の臨時展示、(2)(3)は恒久的な展示であるが、いずれも米国歴史博物館内にある。⁵⁵⁾ 航空宇宙博物館が企画した原爆展と比較すると一つ一つは小規模で、最後の例を除けば歴史的な注釈を加えずに展示しているようである。航空宇宙博物館は、大きな航空機を展示するため展示場の面積は広いが、この種の展示は見当たらない。歴史、社会性、ストーリーの掘り下げが少ないと言えよう。このような社会性を考慮した展示は、米国歴史博物館だから出来たとも思える。博物館はその成立過程で性格がきまる一例であろう。⁵⁶⁾

3.7 航空宇宙博物館の変容は可能か

航空宇宙博物館の展示を、歴史の客観的見直しに変えようとする試みは結局成功しなかった。スミソニアン協会にとっては、ライト兄弟の飛行機に続いて航空機の問題で世論に敗れた二度目の失態である。原爆投下と言う問題が在郷軍人会、議会議員といった圧力に屈したのだろうか。筆者は問題の起源は単にこの時期だけにあるのではなく、博物館の成立の背景にあると考える。

もう一度博物館の実現までの道程を振り返ってみると、それを解く鍵がある。航空博物館実現の動きは、第二次世界大戦後アーノルド将軍とともに始まった。エノラ・ゲイはその目的にそった収集物であったが、一般人はライト兄弟のフライヤーの魅力や米国の第一級のものの殿堂に関心が集中し、航空関係者も市民の愛国心を鼓舞する方向を望んでいた。

一方、リブレー長官は博物館を真に教育的な、研究的の要素をもつことを主張し続け、歴史を客観的に評価する様なアプローチと、その主旨に合う館長を任命しようと志した。しかし、建設の実現についてはリブレー長官やスタッフが「考えられるあらゆる論点」「宇宙旅行への一般人の関心」「大統領の誇り」「ソ連に先をこされる」などという言葉で訴え



図8：友の会誌 AIR & SPACE (September 1995)

50th Anniversary Special

How the War in the Pacific Really Ended 「50周年記念号—太平洋戦争は何故に終了したか」

たが、予算は認められなかった。ようやく問題が最終解決を見たのは、ゴールドウオータ議員が「米国の祝賀の旗をふった時」であった。若者の教育のためという正論や、一般の関心なども役にはたったが、国立航空宇宙博物館の建設が議会によって承認されたのは「ライト兄弟機」「アポロ11号の月面着陸」「セントルイス魂」などの第一級品を祝賀するためであった。

結局スミソニアンのリブレー長官の努力はむくわれず、この博物館が実現したのは保守派のゴールドウオータ議員の働きかけによるものであった。彼は、米国の成長と繁栄は冒険をいとわぬ若者の勤勉さによってもたらされたこと、航空宇宙で若者をひきつけ、愛国者の歴史を訴えることを航空博物館の目的においた。彼は、愛国的な航空機にのみ関心を示し、例えばエノラ・ゲイは不快なものとして受け取っていた。また、開館の時はアポロ月着陸の英雄であるコリンズを館長⁵⁷⁾をすえたことなどからすれば、航空宇宙博物館は、英雄と祭典の展示を脱することは出来ないのではないかと考えられる。このように、この博物館には歴史家の求める展示とは相容れない

伝統と体質があると思える。(図8) ⁵⁸⁾

4. 航空宇宙博物館から学ぶべきもの

以上、批判・外部の意見や世論との対立による失敗を見てきた。これらの批判・失敗を知った上でも、あらためて航空宇宙博物館を見ると、まだまだ学ぶべき点がある。以下、これについて考えてみたい。

4.1 実物による楽しみ

歴史家や評論家のいささか辛口の論評が、現代の科学技術の展示のすべてであろうか。現代は多様性に富んだ展示、試みがゆるされる時代であると思う。

科学技術博物には大別して三つのタイプがあるとされる。「科学キャビネット」「科学技術史博物館」「サイエンスセンター」である。⁵⁹⁾ キャビネットの多くは中世から科学革命時代に現れたものであろうが、スミソニアン航空宇宙博物館は見方によっては航空機の珍品のキャビネットと言えよう。

展示品は国威掲揚、英雄崇拜の場ともみなせる。しかし、ここを訪れることは大人も子供も不思議と心がおどる。何よりも観客の数がそれを裏付けていると言える。⁶⁰⁾ 何故だろうか、例えば大人がビンテージ・カーを観覧するとき、そこには多くの説明はいらない。せいぜい大まかな時代と製造者の名前がわかれば、結構ためつすがめつして楽しめるのではないか。これと共通点があるのかもしれない。

名画の観賞はいくらビデオで観察しても、その筆のタッチの繊細さや荒々しさの感覚をうることは出来ない。同様に実物の航空機のもつ、大きさ、巨大さに圧倒されるのは、実物を見なければ始まらない。現代のハンズ・オンとも共通点がある。出来るだけレプリカをさけて観賞できるように、本物を展示するのはスミソニアンの伝統である。

ともするとキャビネットは過去のもので、科学技術の展示はすべて歴史家の批判を基に社会性を追求しなければならないか、あるいは科学を啓蒙するサイエンスセンターへ移行するかに思える。説明を行き届かせるために、過度に文章化したり、対話型にして細かな注意を払う。しかし、そうせずとも楽しい見せ物の場が、20世紀でも存在することがこの航空宇宙博物館からわかる。

4.2 博物館の性格変更の難しさ。

すでに述べたが、博物館の展示が科学技術の時系列的な展示から社会文化史的な展示に大きく変わって例として、1980年の米国歴史博物館がある。⁶¹⁾ しかし、これは歴史家の指摘や要請だけによって可能になったのではない。長官の考え方や成立当初から、米国の政治・文化・社会遺産を示すコレクションが、科学技術の資料や特許庁の特許モデルとともに引き継がれていたことにも背景にあり、展示の変更に対処できる要因があったと思われる。⁶²⁾ それと比較したとき、航空宇宙博物館の成立に至る背景から祝賀の祭典を脱することが出来ないことは、エノラ・ゲイの展示にいたる経過を見ただけでも明かであろう。

代表的な科学技術の博物館のフォード博物館、ドイツ博物館、エクスポラトリウムも、それぞれヘンリー・フォード (Henry Ford, 1863-1947)、オスカー・ミラー (Oscar von Millar, 1855-1934)、オッペンハイマー (Frank Oppenheimer) といった強烈な個性をもった創始者によって設立された。また設立の過程と創始者の個性が、それぞれの博物館のその後の性格と歩みを決めた。⁶³⁾

途中から性格を変えようとする場合はどうだろうか、路線変更のリーダーにはやはり創始時と同様な個性が求められるものと思われる。シカゴの工業科学博物館は、1911年にドイツ博物館をモデルに作られ規模も大きく高い評価をうけてきたが、幾度かの経営危機に陥った。1940年にはロア (Lenox R. Lohr) による新たな企業展示の導入、ダニロフ (Victor J. Danilov 1924-) の参加を得て、1963年に科学教育センターも発足させて、現在に至っている。内容は見世物的な雰囲気ではあるが科学センター的な性格変更成功した例とされている。⁶⁴⁾ 1934年に開館したフランクリン協会科学博物館 (Franklin Institute Science Museum) は、フィラデルフィアで以前は科学を教える博物館 (Science Teaching Museum) として、科学の歴史展示や大規模なアーカイブス持つことで知られていた。しかし1990年の名称変更とともに行われた改革では、一部科学技術の歴史展示と一部サイエンスセンターが並存する、どちらつかずの奇妙な構成になっている。変更に使った人の個性がみられない。

このような例からしても、博物館の性格は創業の精神と成立にいたる背景でかたちづけられ、中途半端な取り組みでは展示思想の変更が困難なことを示している。

5. さいごに

スミソニアン航空宇宙博物館は、日本人の観光客でも必ず訪れる場所であり、昨年からの原爆爆撃機の展示をめぐる論争で日本では一層その名を知られるようになった。ここでは、博物館の成立史を紹介し、展示にはその創立の経過が反映されていることを明らかにした。歴史家はこの航空宇宙博物館の性格を、栄光と英雄の館から変えようとしてきたが、エノラ・ゲイの展示時点では失敗したと言える。またこの出来事は、スミソニアンと外部社会との衝突の結果であったという意味で、ラングレーのライト兄弟論争におけるスミソニアンの失敗と同じパターンであった。

しかし、日本の科学技術博物館の管理者・学芸員が学ぶべき点に、スミソニアンの常に実物の収集をおこたらない姿勢と、所有する資料の研究図書館やアーカイブスを通じて開放していることがある。これは、異なる展示思想をもつ国立航空宇宙博物館と国立米国家歴史博物館の間でも共通している。

最後に客員研究員として受け入れ、スミソニアンでの研究体験を与えてくれた国立米国家歴史博物館のバーナード・S・フィン博士、技術史のご指導をいただき東京農工大の高橋雄造教授、文献調査の便宜をいただいた国立科学博物館図書室に謝意を表したい。

(注)

- 1) "Secretary Adams' Comments", Smithsonian, July (1994), p.6にアダムス長官が「訪問者はスミソニアンは一つだと思って来るが、多数の異質の博物館の集合体に出会う。かつてあるスミソニアンの代表者は博物館群に共通する方針を持たせるのは、猫を一ヶ所に集めようとするようなものだ」と述べている。
- 2) 科学技術博物館の創立と性格との関係については例えば、高橋雄造「科学技術博物館とはなにか」『技術と文明』Vol.6, No.2 (1990) p.31でも言及されている。
- 3) 松本栄寿「スミソニアン協会の科学技術の展示---米国歴史博物館の歴史的背景と現状の活動を中心に」『博物館学雑誌』Vol.20, No.1&2 (1995) pp.40-57
- 4) アメリカン フェスティバル'94実行委員会『オフィシャル・ガイドブック』(1994) pp.21、48
- 5) 国立航空宇宙博物館のビジュアルな案内は例えば『ワシントン航空宇宙博物館』講談社刊(1978)がある。また同博物館からは Official Guide to the National Air and Space Museum, (1993) が発行されている。
- 6) Rita Cipalla, "Martine Harwitt named director of NASM", The Torch (スミソニアン勤務者向けの広報紙), No.87-8, Smithsonian Institution, (August 1987)
- 7) 現在の展示状況などはインターネット (<http://www.nasm.edu>) で調べることができる。
- 8) Official Guide 前掲5) p.95
- 9) スミソニアン・プレスからは『航空の歴史シリーズ』と名付けた書籍が発行されている。1995年春期に同プレスから刊行された36冊の書籍中、航空宇宙博物館の関連図書が7冊を占めている。
- 10) ポール・E・ガーバー基地は、航空宇宙博物館から12キロのメリーランド州シルバーヒルにある航空機の保存、補給、修復センターである。内部は実質本位の博物館(冷暖房なし)として見学することが出来る。1959年以来、67機の歴史的航空機の修復が行われた。例えばライト兄弟のフライヤー機の修復には2000人時を、エノラ・ゲイの修復には44000人時を要した。
- 11) Paul H. Oehser, The Smithsonian Institution, Prager Publishers, (1970), p.223
- 12) 同上, pp.98, 99, 224
- 13) Joe Goodwin, "Trailblazers" The Smithsonian Book of Invention, (1978) pp.40-41
- 14) Alex Roland, "Celebration or Education? The Goals of the U.S. National Air and Space Museum", Industrial Society and its Museums 1890-1990, Harwood Academic Publi-

- cations (1993), pp.78,79
- 15) Robert B.Meyer,Jr., "Langley's Aero Engine of 1903", Smithsonian Annals of Flight, Number 6, Smithsonian Institution Press (1971), pp. vviii,129,187、および市場康男『ライト機は二番手---思い違いの科学史』、朝日新聞社、(1989)、pp.89-100
- 16) Roland 前掲 p.79
- 17) 同上 p.80
- 18) オーベルトの弟子フォン・ブラウン (Wernner von Braun 1912-1977) が第二次世界大戦中にナチス政権下でV2号を開発し、のちアポロ計画の技術指導者になった。
- 19) 的川泰宣『ロケットの昨日・今日・明日』裳華堂、(1995) p.58
- 20) " Robert H. Goddard, American Rocket Pioneer", NASA leaflet, および The Smithsonian Book of Invention, W.W.Norton & Company (1978) pp.40-41
- 21) G. Edward Pendray, "Pioneer Rocket Development in the United States", Technology and Culture, Vol.4, No.4, (1963) pp.384-388
- 22) NASA のゴダード基地のヴァージニア州ワロップ島は、1945年ごろから科学観測ロケットの打ち上げ基地として使われ国際協力に日本も参加した。Wallops, a guide to the facility, NASA GSFC/WFF (1988)
- 23) 軍事博物館をスミソニアンに建設しようとの計画は実現にいたらず、現在は国立歴史博物館に軍事歴史部門として残っている。また Pub. Law. 87-186, 1st Sess., Aug. 30, 1961, 75 Stat. 414. で軍事博物館諮問委員会が設立が決められている。さらに Bryce D. Thompson, US. Military Museums Historic Sites & Exhibits, Military Living Publications, (1992) には全米と海外に散在する米国の軍事関係博物館など424ヶ所が紹介されているが、pp.48, 49 にスミソニアン協会の米国歴史博物館と航空宇宙博物館がとりあげられている。
- 24) Pulic Law 722, 79th Cong. , 2nd. Sess. , 12 Aug. 1946 ; 60 Stat. 955
- なお、航空宇宙博物館の理事会は空軍長官、海軍長官、陸軍長官、海兵隊司令官、沿岸警備隊司令官、NASA 長官、連邦航空局長官またはそれらの任命者、スミソニアン長官、大統領の任命した3名の市民よりなる。
- 25) 以下の記述は主として Roland 前掲14)による。
- 26) James Doolittle については、例えば Stan Cohen, Destination : Tokyo, Pictorial Histories Publication, (1983) に詳しい。
- 27) Paul H. Oehser, The Smithsonian Institution, Praeger Publication (1970) pp.69-71
- 28) スミソニアンの友の会は、友の会誌(スミソニアン・マガジン)の定期講読申込をすると自動的に会員になる。友の会主催の行事には講演会・音楽会・豊富な旅行プログラムなどがある。スミソニアン・マガジンの創刊は1970年で、当初11万部は1994年に240万部になっている。「高橋雄造：米国スミソニアン研究所滞在報告、『博物館学雑誌』Vol.19, No.1&2, (1994) pp.53-54)」を参照。またこのスミソニアン・マガジンには毎号スミソニアン長官の意見のページがあり、そこから協会の基本的な考えをうかがい知ることができる。
- 29) Michal McMahon, "The Romance of Technological Progress : A Critical Review of the National Air and Space Museum", Technology and Culture, Vol.22, (1981), pp.292-293
- 30) " Barry Goldwater received Langley Medal", The Torch No.87-12, (Dec.1987) ゴールドウォーター氏は1977年以来スミソニアンの名誉理事の一員であるが、1987年航空宇宙博物館の実現の功績でラングレー・メダルを贈られた。同氏はアリゾナ州出身の共和党上院議員であり、軍用・民間機あわせて180機種を操縦し計15000時間の滞空経験をもっている。このメダルは1908年にグラハム・ベル (Alexander Graham Bell 1847-1922) の提案で創設されたもので、航空および宇宙科学の貢献者に贈られる。現在までライト兄弟、リンドバーク (Charles Lindbergh)、ゴダード (Robert Goddard)、アラン・シェパード (Alan Sheperd)、ロス・

- ペロー (H. Ross Perot) など19名が受賞している。
- 31) New York Times, July 4, 1976
- 32) Exhibit & Museum Review のいくつかを上げると Eugene S. Ferguson, "Hall of Power Machinery, Museum of History and Technology, US National Museum (Smithsonian)", Vol. 32, No. 1 (Jan. 1968)
W. David Lewis, "Corning Museum of Glass", Vol. 10, No. 1 (Jan. 1969)
Chales K. Hyde, "the Automobil in American Life---an Exhibit at Henry Ford Museum", Vol. 30, No. 1 (Jan. 1989)
Larry Stewart, "The King George III Collection at the Science Museum", Vol. 35, No. 4 (Oct 1994)
などがあり、スミソニアン展示は10件、フォード博物館の展示は7件とりあげられている。これらの内容とその分析については、詳しく稿をあらためて論じたい。
- 33) 科学技術と社会との関係を重視して歴史の研究をする人々をエクスターナリスト (Externalist) と呼ぶ。それにたいして、科学技術はそれ自体に内在する要因によって発展するといった立場をとる人々をインターナリスト (Internalist) と称する。航空宇宙博物館の展示には、技術革新の進歩の様相を強調するものも多く、インターナリスト的であるとも言える。
- 34) MacMahon, 前掲 pp. 284-285
- 35) オハイオ州デイトンのライトパターソン空軍基地に400エーカーの「米国空軍博物館」がある。ここには約200機の軍用機が保有されており、長崎に原爆をおとした「ボックスカー」の完全な機体が1961年以来展示されている。また前掲 Thompson, US. Military Museums, Historic Sites & Exhibits pp. 186-190には、この US Air Force Museum が世界最大の航空博物館と記述されている。
- 36) MacMahon, 前掲 pp. 294-295
- 37) 松本、前掲 pp. 47-48
- 38) Samuel A. Batzli, "From Heroes to Hiroshima : The National Air and Space Museum Adjusts its Point of View", Technology and Culture, Vol. 31, No. 4, (1990) pp. 830-831
- 39) Elen Hirzy, "Discovery/Major new gallery links flight and computer", The Torch (July 1989)
- 40) Batzli, 前掲 p. 833
- 41) Michael R. Williams, "Beyond the Limits : Flight enters the Computer age" at the National Air and Space Museum, Technology and Culture, Vol. 31, No. 4 (October 1990) pp. 838-845、にはこの展示の説明がある。その最終ページには著者が以下の見解をのべている。「歴史家はこの展示から誉める種を見つけることはないだろう。しかし科学技術の種々の部門の相互関係を見出して楽しむ人々、素晴らしい展示自体を素直に見る人々、芸術を一般大衆に説明しようと努力する人々、技術変化の社会・文化の結果と対処できる方法は技術開発の理由を理解することによってであるとする人々はこの展示を楽しむだろう」すなわち展示を担当したキュレータは、「来観者は技術の展示を十分理解し楽しめる」「技術に批判的な展示を好む歴史家の考えはとらない」としている。
- 42) Batzli, 前掲 p. 834, および Joyce Peterson, "NASM/Legend and memories of World War I fighter pilots", The Torch, (Nov. 1993)
- 43) John Barrat, "Researchers analyze strategic bombing during World War II", Smithsonian Research Report, No. 60 (Spring 1990)
- 44) Joyce Peterson, "SI Profile/Gregg Herken takes once-secret missiles public", Torch, (August 1986) にソ連の SS-20 と米国のパーシング II の展示を担当したピータソンの紹介がある。彼は1990年に行われる一連の「戦略爆撃の遺産」(Legacy of Strategic Bombing) シンポジウムの資料、講義録、フィルムなどの作成担当である。
- 45) 中距離核戦力 (INF) 協定は1988年6月1日に効力が発生した米ソ間の中距離核全廃の協定である。廃棄の対象となったのは、500-5500キ

ロのもので未配置や開発中のものもふくまれる。ソ連のSS-20（射程5000キロ）、SS-4（射程2000キロ）、米国のパーシングII（射程1800キロ）などがあり現在相互の査察下に解体・撤去が続いている。

46) Batzli 前掲 pp.834,836

47) 同上 pp.836-837

48) 例えば山崎茂雄、「原爆の歴史的な再検証」を試みたスミソニアン博物館の挫折、『集・博物館ニュース』、玉川学園教育博物館、No.7（1995）。さらに、米国の歴史家の批判書・三国隆志他訳『葬られた原爆展』五月書房、（1995）（Nobile Philip & Barton J. Bernstein, Judgment at the Smithsonian, Marlowe & Company, 1995）には原爆展のたどった経過、当初のSCRIPT全文が収録されている。

49) "Secretary Heyman's comments", Smithsonian, (October 1994) p.9

50) "Secretary Heyman's comments", Smithsonian, (November 1994) pp.10-12

51) "Secretary Heyman's comments", Smithsonian, (January 1995), p.8および"Heyman responds to Enola Gay", The Torch, No.95-1, (January 1995)

52) 現在このエノラ・ゲイの展示には、次のような説明板がつけられている。

THE "ENOLA GAY"

SOMETHING MORE THAN AN AIRPLANE

It was an airplane like so many others that rolled off the wartime assembly lines by the thousands ; an advanced bomber for its day, but only one among many of its breed. It never sported the distinctive nose art that adorned many airplanes. Not until the night before its most important mission did it even bear a name. Its pilot, honoring his mother, had painted on one side in bold letters, ENOLA GAY.

As it lifted off on that mission, it carried within it a weapon of unprecedented power that would bring both death and deliverance.

When the airplane released its heavy load, banked sharply, and turned toward home, history turned with it. By the time its tires touched the earth again, the world had entered a new age.

Fifty years later it seems almost larger than life ; as much an icon, now, as an airplane. After all this time it still evokes intense emotions, from gratitude to grief, its polished surface reflecting the myriad feelings and meanings and memories we bring before it.

また、スミソニアンの中で見られる様々な論議をよぶ展示については松本、前掲3)のpp.51-52に展示例も含めてのべた。

53) "Secretary Heyman's comment", Smithsonian, (September 1995) p.6

54) この日系米人強制収容の展示を1984年に行ったのは、エノラ・ゲイ特別展示を担当したクラウチ主任研究員である。

55) "Commemorating the 50th Anniversary of WWII Exhibitions, Artifacts, and Public Programs", leaflet, NMAH, Smithsonian Institution (1995)

56) 前掲、高橋2) p.31

57) 最初の月面着陸は1969年7月20日のアポロ11号であった。ニール・アームストロング船長と、月着陸船の操縦士エドウィン・オルドリッジが月の「静かな海」に立った。このさい、月の回りで待機し支援した司令機の操縦士がマイケル・コリンズである。

58) 高山正之、「エノラゲイは似合わぬ」『産経新聞』（1995,5月18日）にも同様な見方がある。また前掲48) 三国訳『葬られた原爆展』p.51にはエドワード・リネンサール（ウイスコンシン大学教授『失ってはならない記憶---米国ホロコースト博物館設立の努力』の著者）の言「今から思えば、エノラ・ゲイ展は失敗するに決まっていた。今まで長い間、米国空軍の力を褒め称えるための殿堂であった国立航空宇宙博物館で、疑うべからざる原爆投下の正当性に一石を投じようとしたこと、しかも第二次世界大戦終結50

- 周年記念の日に、祝福の言葉を聴くことを多くの
の人々が期待しているまさにその日に、一石を
投げようとしたことは、現在の政治的現実を余
りに顧慮しなかったことになるだろう」がある。
- 59) 高橋雄造、「科学技術博物館の歴史」『博物館学
雑誌』Vol.15, No.1&2, (1990) pp.4-11
- 60) "Holiday Crowds Jam Mall NASM Hits 5
Million Mark", The Smithsonian Torch
(February 1977) 開館した年の1976年のクリ
スマス休暇には、28万人の来観者があり、内部
の混雑を避けるため一時入口を閉鎖するほどで
あった。
- 61) 岡田茂弘、「変貌する国立米国史博物館」『歴博』、
国立歴史民族博物館、Vol.25 (1987) pp.8-
9 にも1964年創立の国立歴史技術博物館の展示
が、1980年に国立米国歴史博物館名称が変わる
とともに、展示内容が大きく変化したことにふ
れている。
- 62) S. Dillon Ripley, "Statement by the Secre-
tary", Smithsonian Year, (1968) pp.1-3,
では米国歴史博物館に言及し、この博物館は世
界に類例のない博物館であり、教育の博物館で
ある。しかし、すべてが歴史を美化し、ロマン
チックにしてはならない。アングロサクソンの
みでなく、人種の多様性、社会性に目を向ける
べきであると指摘している。また松本、前掲、
p.47にも米国歴史博物館の背景をのべた。
- 63) 科学技術博物館といえども中世時代のキャビネ
ットの手法から、すべてが純粋科学博物館に
衣換えし、サイエンスセンタになってきた訳で
はない。ビンテージカー・古典的カメラ・飛行
機などはコレクションを中心にした古典的なキ
ャビネット手法の方が観客の感性にうったえる
ものがあり、有効な場合も多い。博物館は、今
後とも多様な形が存在し続けるものと思われ
る。アメリカの科学技術博物館の例をとっても
フォード博物館、エクスポトリウム、米国歴
史博物館の展示には共通性は少ないと言って良
い。
- 米国歴史博物館のキュレータ、フィン博士も
Bernard S. Finn, "Exhibit Reviews—Twenty
Years After", Technology and Culture,
Vol.30, No.4 (Oct.1989) p.997で展示を社会
的な背景をのみ追いつぎてはならない。博物館
の歴史的重要な物の収蔵庫の役割は今でももっ
ているし、展示も必要であることは変わらないと
の指摘もしている。
- 64) 前掲、高橋、2) p.31-32, および高橋雄造、
「最近の科学技術博物館」『博物館学雑誌』
Vol.16, No.1&2, (1991), pp.12-13
(1995年12月23日受理)

(34頁から続く)

- 例」『博物館学雑誌』第13巻第1-2号合併
号, pp1-6 (全日本博物館学会, 1988年)
- 9) 「博物館と環境教育」『博物館学雑誌』第11巻
第2号, pp1-10 (全日本博物館学会, 1986
年)
- 10) 中川志郎「一自然史系地方博物館の成立経緯
とその展開」『季刊ミュージアム・データ』
No28, pp1-10 (丹青研究所・文化空間研
究部, 1995年)
- 11) イギリスでは、1988年の「教育改革法」に基
づいて、1989年に全国共通カリキュラムが施
行され、環境教育が教育課程に正式に位置づ
けられた。イギリスのナショナル・カリキュ
ラムについては、石原淳「イギリスの学校教
育における環境教育」環境教育 VOL.3 No.1
pp19-27 1993年、石原淳「イギリスの環境
教育」環境教育 VOL.2 No.2 pp34-42
1993年、水越敏行・熱海則夫編『環境教育・
新学校教育全集5』(ぎょうせい)、佐島群巳・
中山和彦編『世界の環境教育・地球化時代の
環境教育4』(国土社) などがある。
(1996年8月20日受理)